

# 施設入所児の発達保障を理論づける 開放系と授抱性の概念

金子 龍太郎

## 1. はじめに

児童福祉の現場に携わってきて、実の親と離れて暮らさざるを得ない施設児の発達保障に有用なモデル・理論を求めてきた。その中で、養育者と子どもの関係をシステムとしてとらえ、開かれた可塑性のある人間環境と生活環境を想定する開放系モデルが有効だと考えるに至った。生命体としての人間存在を開放系、そして養育者に保護されて育てられる存在を授抱性にとらえることにより、施設の子どもたちの発達保障を理論づける可能性を論じたい。

## 2. 開放系

### 1) 生体理解のための開放系概念

「開放系 (Open System)」の概念は、生命体が外界と常に関連を持っていることを示し、人間存在も例外ではないとする。つまり、外界・他者を知覚・認知し、学習し模倣すると同時に、人間存在そのものが刺激となって外界や他者に伝わり、影響を与えるという、環境（周囲の対人的、物理的環境をすべて含む）に対して開かれた系を形成していることを意味する概念なのである。それに対して、外界と関連を持たない孤立した系を閉鎖系 (Close System) と称する。

ここで系 (システム) とは、多数の要素から成り立つ集合体が、構成要素間相互に、さらには外部環境との間で力動的な交渉を行うものと定義する。システムでは、それぞれの要素間に相互関係があり、各要素の動きや性質は相互関係を通じて全体として統制され、その結果、全体はあたかも一つの個体のように秩序立った動きや性質を示す。また、要素間の関係に影響しなければ、要素内容や実体の違いは無視され、要素の代替が可能だと考えられる。たとえば、人間の体は個人によって差があるが、さまざまな器官のシステムとしてみた場合は、どの体も同様のシステムだとみなされるのである (中川、1992)。こうして、生命現象を理解するためには、個々の構成要素の性質と、構成要素から成り立つ統一体としての動的・自律的系としての生体を同時に認識する視点が求められる。生体の構成物質の理解と同時に、システム概念を合わせて把握することにより、正しい生命理解にせまれるともいえる (吉川、1992)。

さて、開放系の考えは1930年頃に、理論生物学者の Bertalanffy によって提唱されている。そしてその後、開放系は生物学のみならず、その基本的理論はサイバネティクスや量子力学といった近代物理学にも関わる包括的な概念として確立され、物理学から生態学までの自然科学

を貫く統一的概念（一般システム理論）として提唱されるに至った（Bertalanffy、1949；1968）。

彼によれば、開放系である生体は常に外界と物質・エネルギー・情報を交換し、絶えず変化しつつある非平衡系・エントロピー減少系で、能動的・自律的な存在だという。このような彼の理論を構成する概念としては、全体性と開放系に加えて、非平衡系、等結果性、微細なゆらぎの増幅、等が挙げられる。それらの考えは次の通りである。

まず、生物を動的に把握することは近代生物学の最も重要な原理の一つである。物理学的視点からみても、生きている生体は外界に対して閉じられたシステムではなく、開放系であり、構成素材をたえず外から受け取り、外に排出する。生体システムはこのようにたえず交代しつつも、ある定常状態を保つ。そして、この非平衡の定常状態ということが、人工の機械系とは異なる、生体の大きな特徴なのである。

また、周囲と物質交代をする開放系は、システムが定常状態に達しているかぎり、この状態は初期条件に無関係、つまり等結果的である。すなわち、最終状態は初めの条件によるのではなく、関係を支配するシステムの条件に依存しており、これも生体の特有なシステム特性から派生してきた必然的な結果である。さらに生体内では、微視的なゆらぎ現象がシステムの広い領域にゆきわたっていき、生体中の微視的物理現象が、中枢神経系によって増幅されて巨視的な影響を現すという特異な性質をも有しているというのである。

## 2) 前成と後成 —システム発生と個体発生—

外界に開かれた生体系は、環境と一体として理解される。そして、進化の過程で環境情報をDNA上の30億対に及ぶ塩基配列の形でプログラムしてきたのであるから、将来個体発生上で出会う環境の存在をあらかじめ想定した情報も持ち合わせている生体には、合目的性が認められるのである。その意味で発達には前成的である。しかし、DNAのプログラムが発現するためには、内部・外部環境の存在が前提となり、また大脳皮質神経系のシナプス結合が外界の情報を受容し、変化し続けることから後成的な現象といえる。そして何よりも、DNAは環境の変化に対応できるプログラムを持っている。すなわち、前成と後成はこれまでは二者択一的に考えられてきたが、双方共認める「相補的」理解が成り立つ。これは、量子力学において、光が粒子でありかつ波である、と一見相矛盾した2つの性質が同時に成立することと同様である。

ところで、人間は、事象を学習し他者を模倣する存在ともいえよう。人間の新生児は学習する能力が非常に高く、かつ大人になるまでの子ども時代が約20年という非常に長いことから、学習はどの動物よりも重要な役割を果たす。人間が人間として生きていくためには、学ぶことが不可欠な存在に生まれついている。このことは育児という、生物にとって根本的な行動においても当てはまる。たとえば、犬では遺伝的に育児行動を正しく行うように生まれついている、親から教わることなく子育てを行うことができる。それに対して人類では、親や他人の子育てを見たり、親から教わったり、弟妹の世話をしたり、育児書を読むことによってはじめて正しい育児様式が身につく。つまり、後天的な学習によって育児行動が正しく現れ、それが子孫に

育児文化として継承される。だが、犬も人間もどちらも子孫を残す営みという点では同じことを行っている。どちらが優れていてどちらが劣っているというものではなく、先天的（系統発生的）学習と後天的（個体発生的）学習の関わり方が両種間で異なっていると理解すべきであろう。というのは人間の場合、誰かから教わらなければ種存続の根本ともいえる育児さえもまともに行うことはできないからである。また、誤った養育の元で育てられた子どもが、自分が親になったときにわが子に対して虐待などの異常な行動をとることもある。このように考えると、人間が他の生物よりもすぐれている存在（万物の霊長）とばかりはいえまい。学習の関与が大きい存在だからこそ、誤った行動を学んでしまうと他の動物よりも劣ることもある。

人間社会では、わが子を拒否・虐待したり、捨てたり置き去りにする親が、古今東西出現してきた。このような育児行動に歪みがみられる親たちの存在からも、人間の育児能力には後天的な学習の関与が大きいことが示唆される。また異常な育児行動は、動物園で飼育されてきたチンパンジーやゴリラなどの類人猿にも見られる。動物園という特殊な環境の元で正しい社会性を習得できずに成体となり、自分の子どもを育てることができず、飼育係が代わりに育てることも生じている。こうした類人猿に対しては、他の個体が正常な育児をしている姿を見せるなどして、正しい育児行動を身につけさせようという試みによって改善させている（増井、1986）。いずれにしても、育児に学習要因が大きく関与している類人猿や人間では、正常な社会環境の元に置かれないと、正しい育児に結びつく学習を行えずに異常な行動を示すようになる。

さて、親子の絆の形成を通して、同種個体の認識ができあがっていくのであるが、親と子どもの絆が形成されていく過程は種によって様々である。たとえば、カッコウなどの托卵性の鳥類では、生得的に同種個体の姿が中枢神経系の中に「刷り上がって」おり、実の親や同種の仲間を全く見ることなく一羽だけで育ったカッコウが、巣立った後に同種の異性の個体とつがうことができる。カッコウにおいて、後天的に親子の絆が形成されるような刷り込みプログラムを持っていれば、ヒナ時代には養い親の鳥しか見ないため、カッコウは養い親のモズやホオジロを親と思って育つ。そうすると、将来カッコウ社会の一員になれず、種の存続が不可能になってしまう。そのため、カッコウでは親子の絆が後天的にできないような、刷り上がり（preprinting）プログラムとなっているはずである。

また、ニワトリやカモといった離巢性の鳥類では、孵化したヒナが初めて見た動く物体を親と思い込んでしまう。普通はその対象は親鳥であるが、最初に見たのが人間であれば人間を親と思い込んで後を追うのである。そして、この刷り込み（imprinting）は修正が効かない。一方、ヤギやヒツジなどの哺乳類では、母親が生まれ出たわが子の匂い、羊水の匂いによって、わが子を認識する現象が知られている。嗅覚だけによって自分の子どもと他の子どもを区別して、自分の子どもだけを世話する。ところが、実験的に出産直後の幼体に他の個体の匂いをつけると、わが子であっても母親は一切見向きもしない（Sluckin、1969）。こうした刷り込み現象においては、一度の学習によって形成された親子関係が終生ほとんど変化しないという特徴を持っている。

## 金子 龍太郎

さて人類の場合は、親子の絆が育つためには、長期にわたって親と子どもが生活を共にして関わる関係を維持しなくてはならない。既に妊娠中から親になる準備が始まっており、出生後初めてわが子を見た時からその子に対する思い入れが始まり、毎日の世話を通して徐々に親としての愛情が育っていく。また、子どもの側では親を自分に引きつけるために備わっている愛らしい特性や、泣く・微笑むという行動を通して親の育児行動を喚起させる。このように乳児は受け身ばかりでなく、能動的に親と関わり、数か月経てば親とそれ以外の人間を正しく区別して、人見知りが顕在化する。そしてお互いのイメージが書き込まれていき (writing)、親の側では「これこそ我が子」、子どもの側では「これこそ我が親」と思い込むようになっていく。このように両者が継続的に関われる環境が保障されなければ親子の認識は成立しない。実の親であっても、育児に携わらなかつたり、途中で親が代わつたりすると、わが子からは親として認めてもらえないことも起こりうるし、実の子どもであっても、出産後に未熟児室に長く入って実母からの世話を受けないでいると、その後の実母の愛情が薄くなることも生じる。人間の場合、可塑性・柔軟性に富んでいるとはいえ、乳児期に正しい親子関係が形成されなければそれ以降の修正は困難となる。

さて、前述のように親子の絆の形成過程では、先天的に同種個体のイメージが中枢神経系に刷り上がっている動物もいれば、一度の出会いで不可逆的な絆が形成される動物もいる。さらに、長期にわたって継続的に親子が関わる必要がある人間のような存在もある。種によって親子の絆の形成過程は様々であるが、どの様な学習を行うかは系統発生の過程で遺伝子にプログラムされている。つまり、カッコウは刷り上がり (preprinting)、ニワトリは刷り込み (imprinting)、そして人間では書込み (writing) プログラムという、系統発生的機構と個体発生的機構の相対的関与度の違いといった種特異性が、親子の絆を形成するプログラムに存在していると解釈できよう。どの生物においても系統発生的学習と個体発生的学習の双方が育児行動や親子関係の習得に関与しており、種ごとにその生物の生存を全うするようにプログラムされた設計図 (DNA) が存在している。そして人間の場合は、後天的な個体発生上での学習に大きく依存することを前提とした遺伝的特性を有している。換言すれば自由度が非常に大きい存在であり、人間の脳は他のどの動物よりも大きく、高度な機能を持っており、様々な後天的情報を処理して蓄積できる。しかしその反面、人類の生存や子孫の存続という点では不適切な行動をも学んでしまうことも起こり得る。したがって、生得的特性を正しく発現させ、人類の生存に沿うためには後天的学習がどの生物より大切になり、その学習が正しく行われるための環境が重要になってくる。

このように考えると、人類は生物世界の頂点に立つ、もっともすぐれた万物の霊長なのではなく、他の生物と同様に、生育環境に適応して進化してきた DNA 型生物の一員といえよう。そして、人類は道具や文明の力を用いて環境を変えていき、自ら望むような状況をつくり出す方向に進化した動物であり、それ故に人類ほど自由な動物はいない。しかし、自由だから無条件にすぐれているわけではなく、ただ自由度の高い生物といえるだけである。

DNA の持っている遺伝情報は設計図である。設計図のみでは生体の構造・機能を形成できないのはいうまでもない。DNA は生体の構造と機能をつくり出す情報を持っているだけであり、DNA の情報に基づいて合成された各種蛋白質が生体を形成し、様々な機能を発揮するわけであるが、その際に様々な後天的要因が関与してくる。一例を挙げると Hubel と Wiesel (1962) の視神経系の研究によれば、脳内神経細胞の配線は遺伝的に決定されているが、それは生後のある期間に外界からの刺激を受けて、ある経路だけが選択的に反応することではじめて顕在化する。そして、神経細胞が刺激を受けなければ、その発達は阻害されてしまう。神経細胞間の配線の存在そのものは遺伝的に決定されているが、脳には高い可塑性があり、外部情報が経路の髓鞘化などの脳の構造に影響を及ぼすのである。

最後に、Thomas と Chess (1980) は乳児期初期からの気質的差異を見出し、その特性が幼児期・学童期・青年期にも一貫して存在するか否かを、長期にわたる縦断的研究によって検討してきた。その結果、初期気質特性や行動からその後の特性を予測することができなかった。つまり、乳児期と成人後の特性間には明らかな一貫性が見受けられず、どんな場合でも子どもと環境との相互作用が多様な結果をもたらしたのである。

Thomas と Chess は以上の事実に基づいて、次の説を展開している。すなわち、子どもは生まれたときから環境との相互作用のなかで、能動的な行為の主体として存在しており、気質に見られる個性がどの年齢においても影響を及ぼしている。また、可塑性があるからこそ、子どもの性質が環境の性質に応じて変容していき、複数の発達経路が可能になり、成人に至る経路は実に多様であった。こうした結果から、初期経験がその後の発達に対して、重要であることには異論はないが、それは決定的ということではないと彼らは考察した。そして、発達過程は継続的で、受精から成体に至るまでの各時期はそれぞれ重要性をもっており、どの時期においても環境との関わりは絶えないと考えるに至った。

彼らの結論として、気質は生体にみられるひとつの属性にすぎず、時々刻々、子どもと子どもを取り巻く環境は変化し続け、発達は生体とその内部環境、及び生体と外部環境の間において、相互作用の結果から出てくる新しい様々な構造と行動の変容といえる。そして、生体が発達する過程における相互作用は、遺伝と環境との間でおこるといようなものではなく、開放系存在の必然的性質として、生体と環境との間で生じるものである。

彼らは当初、成人の気質特性が乳児期初期の行動様式から予測できると考えていたが、こうした考え方は、人間の行動発達が生体と環境の絶えざる関わりの中で推移するという、開放系の概念と矛盾していたのであった。

### 3) 施設入所児の発達保障と関連する諸理論

— Bowlby・Lewis・Bower・Harlow・Hassenstein —

#### ① Bowlby の愛着理論

元々精神分析学者である Bowlby は、その後、行動生物学や情報科学の知見を取り入れて、総合的な愛着理論を構成していった (Bowlby, 1982)。彼によれば、愛着行動とは、安全調節シ

システム (safety regulating system) と呼ばれるものから生み出され、子どもの危険を回避し、不安を解消し、そして愛着対象の側では安全だと認識させる行動であるという。安全調整システムとしての愛着行動がもたらす重要な生物学的機能は、動き回る子どもや成長しつつある子どもを数多くの危険から守ることにある。中でも捕食者や襲撃者の危険から子どもを守ることがもっとも重要であると Bowlby は考えている。

また、彼の理論の中心にあるのは連続性の仮説、つまり、ある社会的経験がその後の経験へとひきつがれるという漸成説 (epigenetic theory) である。この説では、乳児はまず家族の一人と愛着を形成する。その対象は普通は母親であり、その母子特有の関係がその後の対人関係の基盤となると考える。そしてその基盤をもとに、あらゆる対人関係が発展していくという直線的発達論が論じられている。

Bowlby の愛着モデルには、行動システムとその制御、情報と負のフィードバック、そしてホメオスタシスが取り入れられており、情報科学モデルといえよう。システムには、目的性とフィードバックが組み込まれており、何らかの方向に目的づけられた行動が、絶えず中枢の調節機構に送り返されることで、当初の目的が修正されるという機能を仮定している。この点ではサイバネティクスの原理と合い通じる。さらに、進化論や行動生物学などの今日の生物学理論も導入しており、生体は閉鎖系ではなく、開放系として存在すると考えている。

彼の考えは、人間と他の動物の連続性の上に立った理論であり、多くの種に共通する基本的機能を基にして、独自の方向性や精巧度を加えたものが人間の行動であり、母子の愛着も例外ではないという。今日の生物を取り巻く環境は、現在に至る進化の過程で取り込んできた環境特性によって規定され、生物が適応できる環境は限定される。そして生体は、適応可能な環境内において、その種の生存を保障するように遺伝的に組み込まれているのであり、いかに可塑性・柔軟性があるといっても、あらゆる環境に適応できる生体は存在しない。こうして、生体系を考える場合には、その生体を取り巻く環境も同時に考慮しなければならない。人間は環境をかなり自由に変える特殊な能力を有しているため、生物としての人間が進化の過程で適応してきた環境とかけはなれたものにしてしまう危険性もある。従って、人間の子どもの育てられる文化的・社会的環境が、適応性のある環境 (父母、兄弟姉妹、祖父母、親族を含む社会的環境：すなわち家族) から離れれば離れるほど、ますます人間行動の不適応が増す危険性に留意する必要があると Bowlby は警告する。

## ② Lewis の社会的ネットワーク理論

Lewis (1979) の社会的ネットワーク理論は、同時に複数の愛着の存在を認める点で、Bowlby の理論とは異なっている。そして彼は、母子関係が他の対人関係の決定要因とはならないと主張する。というのは、新生児はさまざまな結びつきをもつ世界、すなわち社会的ネットワークの中に生まれると考えるからである。最初に結びつくのは母親だが、すぐに他の家族などにも愛着を抱くようになり、多様なネットワークが作られる。たとえば、文化・社会の違いによって母親だけが養育する場合もあれば、母親に祖母兄弟姉が加わる場合、あるいは家庭外

で保母が世話する場合も考えられる。そうした中に、伝統的母子関係として生後2、3年間、母親だけが乳児と関わる場合があるのであり、それは多様な社会の中での一形態にすぎないというのである。

Lewisによれば、母子関係と仲間関係は生涯を通して互いに影響し合う。だが、仲間関係は独立した道筋を通り、初期の母子関係によって決定されない。それ故、母子間の愛着は対人関係に影響を及ぼすかもしれないが、友人関係は母子関係によって直接決定されない。また、初期に子どもと母親の関係が貧弱であっても、子どもと子どもとの関係がその代償として役立つかもしれないと考える。そして、初期に仲間と良好な関係を持つと、親との相互作用が貧弱であっても、それを補償して、後の社会性の発達に良い結果をもたらすかもしれないというのである。

次に、彼の理論で特徴的なモデルとして、社会的対象（人間）と社会的機能（保護、世話、いつくしみ、遊び、探索・学習）との2次元マトリックスモデルがある（図1）。ここでは、マトリックスの全機能が大切ではあるが、社会的対象も機能も発達上で変容することが予想される。子どもの成長につれて、より多くの人々と出会うと同時に、それまで優勢だった機能に代わって新しい機能が生じてくる。すなわち、世話やいつくしみが減少し、学習や遊びの機能が増加していく。こうして社会的対象と機能のマトリックスを構成することにより、子どもの社会的ネットワークをあらわすモデルができ、年齢や文化によってこのネットワークを構成する人々や機能の多様性が変化する様相を把握できる。さらに彼は、状況（Setting）を加えて、機

		社会的機能					
		F <sub>1</sub>	F <sub>2</sub>	F <sub>3</sub>	F <sub>4</sub>	F <sub>5</sub>	F <sub>m</sub>
		保 護 B <sub>11</sub> B <sub>12</sub> B <sub>13</sub>	世 話 B <sub>21</sub> B <sub>22</sub> B <sub>23</sub>	いつくしみ B <sub>31</sub> B <sub>32</sub>	あそび	探索/学習	B <sub>1..</sub>
			食 事 着替え	なだめる キ ス			
P <sub>1</sub>	自 己						
P <sub>2</sub>	母 親						
P <sub>3</sub>	父 親						
P <sub>4</sub>	仲 間						
P <sub>5</sub>	兄 弟						
P <sub>6</sub>	祖父母						
P <sub>7</sub>	お ば						
	⋮						
P <sub>n</sub>	⋮						

図1 社会的対象と機能の関係性を示すマトリックス (Lewis, 1979)

能 (Function) と社会的対象 (People) を合わせた3次元のマトリックスモデルへと発展させている (Lewis & Feiring, 1989)。

社会的ネットワークを構成する社会的対象には、すべての人が含まれる。なぜなら、子どもが愛着の対象とするのはどの人物であるかわからないからである。こうして Lewis は、社会的ネットワークを有する人間存在を有機的システムとみなし、開かれた系としての子どもの存在を主張する。そして、子育てはどの文化・社会においても不変ではなく、社会や文化が変化すれば子育ても変化すると考える。そのような多様性と変容可能性の考えが、彼の社会的ネットワークの底流に存在するのである。

### ③ Bower のコミュニケーション理論

Bower (1977) は、愛着の対象が特定の人物に限定されるのではなく、乳児と社会的に密接に関わる人物であれば誰でも、愛着を抱くようになると考えた。出生直後から、新生児は周囲の大人と何らかのコミュニケーションを行うことができる。それは非言語的で、一般的には母親との間で成立する。そして乳児と母親の間には、2人だけに通じる特別のコミュニケーションが発達していき、特殊な相互交渉が成り立っていく。そのため6、7か月になると、母親以外の大人とはコミュニケーションが成り立たず、不安や恐れを抱き、いわゆる人見知りを示すようになり、この現象は3歳すぎまで続く。しかし4歳以上になり、子どものコミュニケーション能力が発達し、誰とでも交流できる水準に到達して、分離不安が減少していくと考えるのである (図2)。

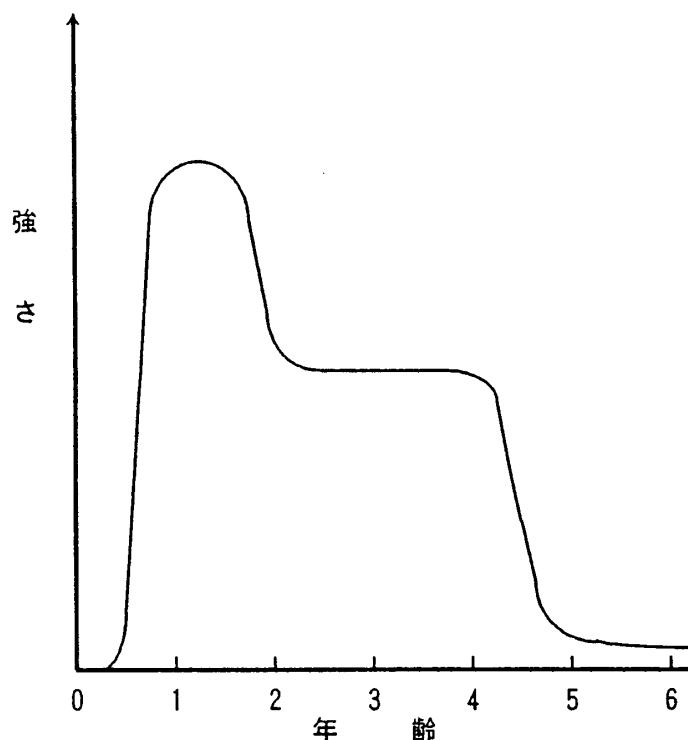


図2 年齢に伴って分離不安の強さが変化する。このデータは多くの研究から集められているので、えがかれている曲線は分離不安反応の方向と変化の割合を一般的に示すものにすぎない。(Bower, 1977)



彼によれば、コミュニケーション能力は学習されるものであり、生後数年経過すると、この学習は困難になるかもしれないが、それでも可能性があり、何らかの学習が成立すると主張する。そうした学習を阻害する状況としては、乳児が放任されたり、養育者が次々に交代するような事態がある。これがコミュニケーションの不成立をもたらし、誰とも深い関係が持てない、愛情欠損性性格を生み出す原因となる。このような環境下に置かれた子どもは、多くの場合、表面的な浅い対人関係にとどまり、正常で深い人間関係を確立することができない。しかしながら、広く浅いコミュニケーションしか成立しない環境下に置かれた子どもは、それ以外の対人関係を確立できるわけがないであろうと Bower は主張するのである。

さて、第2次世界大戦直後の、戦災孤児を収容していた施設において、養育者との交流が阻害されていた子どもたちが、正常な人格発達を遂げていた例があった。ここでは、孤児同士の愛着が強く、それによって救われていたのだった。こうした実例から、その場合には Bowlby のような母性剥奪が存在したのではなく、むしろ愛着関係の剥奪があったのであり、特定の人間との深いコミュニケーションが成立しなかったのだと彼は論じる。愛着対象が母親であろうと保母であろうと、さらには仲間の子どもたちであろうと本質的な問題ではなく、根本的理由は誰であろうとコミュニケーションが成立しなかったためなのであった。そして Bower は、新生児が生得的に他者と交渉する能力を備えているだけでなく、実際に交渉する相手を持つことが必要なのだという。能力があっても、愛着対象がなければ、極端な場合には死に至るような障害をもたらすのである。いかに養育条件が剥奪されている事態においても、乳児は備わったコミュニケーション能力を駆使して、低い水準であっても他者との対人関係を発達させていく。そして、そうした試みは生後数年経過しても継続して行われているため、生後かなりの期間修正がきく。その意味で、人間のコミュニケーションの発達には、臨界期はなく敏感期があるというべきである。

#### ④ Harlow の5つの愛情系理論

Harlow (1971; 1979) はアカゲザル乳児の膨大な隔離実験を繰り返す中で、5つの愛情系の存在を見出し、それらの愛情系がどのように発達していき、相互にどう関わっているかを論じた。ここにおいて、Harlow は愛情という言葉、他の個体との結びつきといった社会的行動にまで使用し、広く解釈している。その5つの愛情系は次の通りである。

- ① 子どもに対する母親の愛情、母性的愛情系
- ② 母親に対する子どもの愛情、子どもの愛情系
- ③ 成熟した雄が子どもに対して示す、父性的愛情系
- ④ 仲間同士の結びつき、仲間の愛情系
- ⑤ 異性間の性的な、異性の愛情系

これらの異なる愛情系はお互いに独立しており、直接的因果関係はないと彼は考えている。そして、各愛情系は独自の段階をへて発達していく。ところが、母性的愛情系と異性の愛情系との2つの系は、明瞭に区分されていながら密接なつながりを持ち、相互の発達に影響を及ぼ

すという事実も同時に成り立つ。その理由として、母子間の愛着行動と性的行動には、共通の要素と共通の基盤が含まれていることが挙げられよう。

彼の一連のアカゲザルの研究から、母ザルは子ザルを保護するだけでなく、将来、子どもが自立した個体となりうるように、子ザルと身体的接触を断ち、独立へ導くことが明らかとなった。母子の愛情系においては、最初密着していた両者は、その後距離をおくようになり、さらには分離や相対的自立の段階に至る。その過程の中では、子どもは他の存在、特に仲間に興味を抱くようになると同時に、母親の側でも子どもを拒絶し始めるといった、両方の側で変化が生じてくる。そうして、母性行動が初期の形態とは異なる様相へと発達的に変化していくのである。したがって、そこでは将来の子どもの自立に伴う親子の分離—親別れと子別れ—を前提とした養育が営まれている。母子がいつまでも密着しすぎると、母子の愛情系が強くなりすぎて固着し、次に来るべき仲間との愛情系への移行、さらには異性との正常な愛情系の発達も望めないのである。

こうして、Harlow はアカゲザルの隔離実験を繰り返し、隔離子ザルに対する代理母親の役割を解明してきた上で、社会化の過程の初期においては、母親ザルに取って代わる適切な代用物はないと結論するに至った。膨大な実験を行ってきた Harlow の言葉だけに傾聴に値する。

#### ⑤ Hassenstein の5つの行動様式の発達モデル

Hassenstein (1987) は、人間の子どもの比較行動学の立場から研究していく中で、子どもの発達上、主たる5つの行動様式を取り上げ、個体発生上での変容の姿を図示した(図3)。それによると、出生時に既に①栄養摂取と②初期の接触要求という2つの行動様式が機能している。その後、③母子の個別的絆が形成され、続いて④探索・遊びが生じ、最後に⑤性成熟が

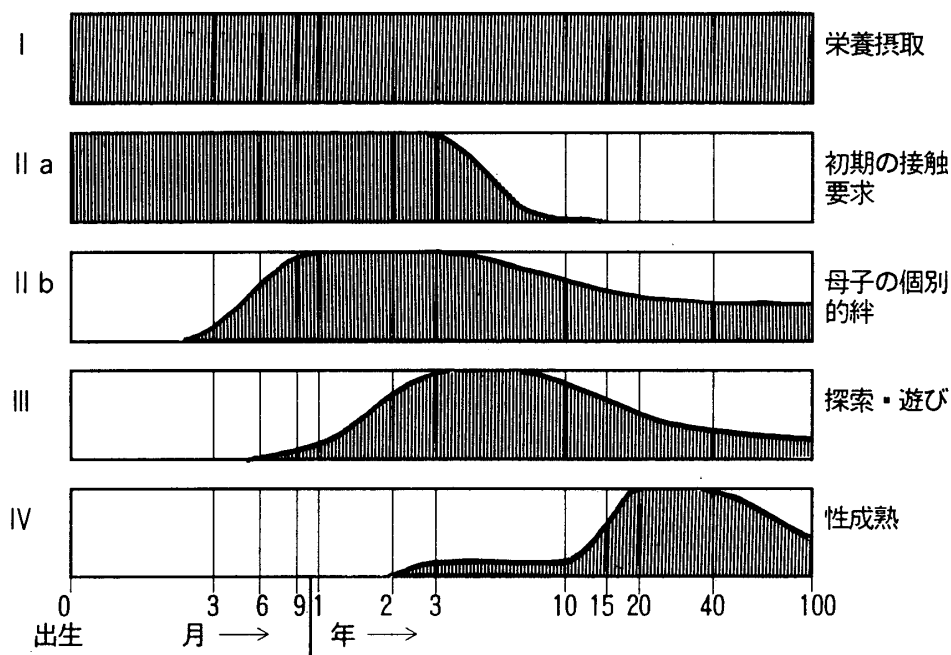


図3 比較行動学の立場からみた人間行動の各様式における発達的変化の模式図 (Hassenstein, 1987)

くる。これらの5つの行動様式は、次々に顕在化していくが、その時期はずれており、順序が入れ代わることはない。

図3に示されている5つの行動様式の各段は、左から右へと対数で表示された年齢に伴って発達的に変化していく、それぞれの行動様式の様相を表している。そこでは、年齢増加とともに、既に存在している行動に新たな行動様式が加わっていき、全体としては、時間の経過とともに多様性を増し成熟に向かう。このモデルによって、多様な機能の個体発生上の変遷を整理して理解できよう。

#### 4) 機能・人間環境・生活環境

上記の諸理論の中から、Hassenstein (1987) の図を基にして、Lewis ら (1989) の3次元マトリックスモデルを結びつけて、機能面、人間環境、そして生活環境の3側面を別々に示し、子どもと系を構成する要素が発達上で力動的に変化していくモデルを提示する。このモデルでは、子どもの各機能の相対的発達様相(図4)に伴って、人間環境(図5)や生活環境(図6)との関わりが変化していくととらえる。そして、ある年齢段階ではその時期の機能のあり

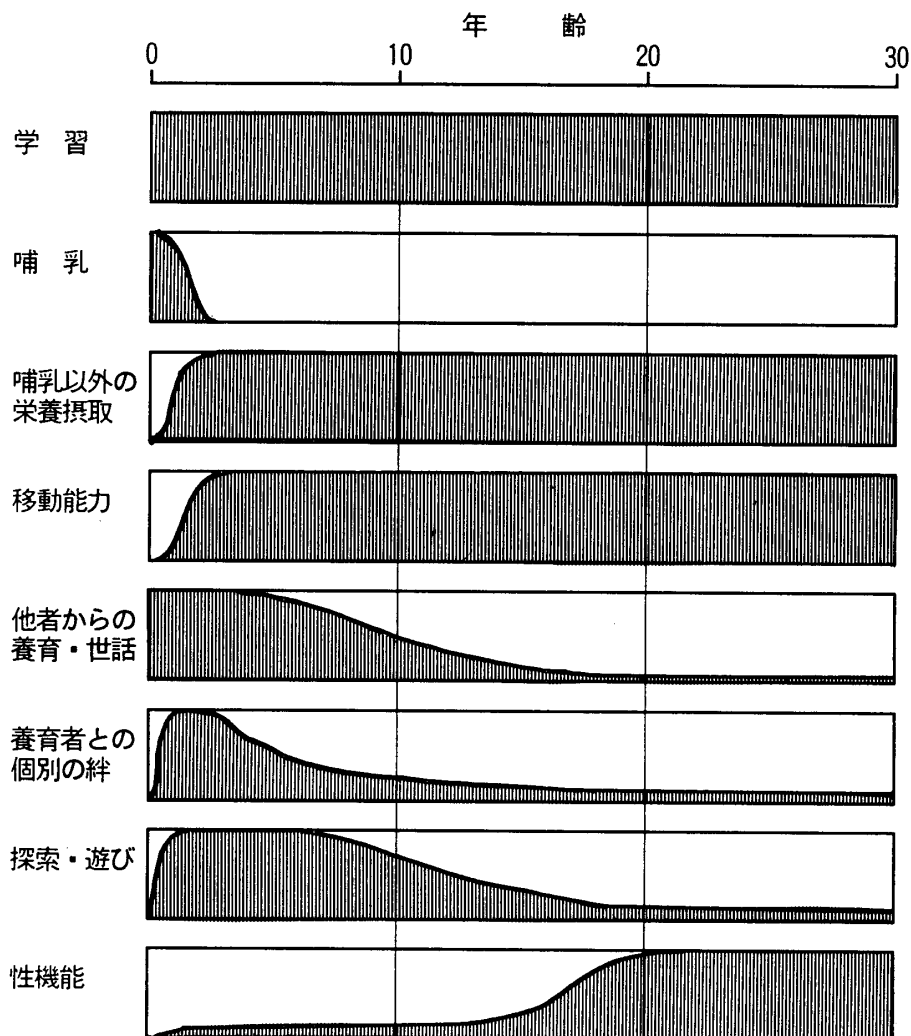


図4 各機能の相対的発達様相

方によって、複数の構成要素（人間環境）と関わっており、いずれか1つの構成要素（たとえば母親）と排他的な結びつきをしているものではないとする。そして系の構成要素との相対的関わりは、発達上で時々刻々と変わっていく、と同時に生活環境の展開が見られる。この中で、これらの3つの図はあくまで一般的な姿に基づいており、文化・社会の違いにより、その様相は多様性に富むと想定している。また、発達は受精時から始まり、死に至るまで（さらにいえば、死は発達過程の途中にすぎない）の100年に及ぶ現象であるが、本論では乳幼児期に焦点を当てているため、30歳までを図示した。

まず、機能面（図4）では、人間の発達において必要不可欠な機能を構成する、主たる下位系を各側面毎に示している。ここでは、Hassenstein の5つの行動様式にいくつかの機能を付け加えて、次の8つの主な機能を取り上げた。それは、①学習、②哺乳、③哺乳以外の栄養摂取、④移動能力、⑤他者からの養育・世話、⑥養育者との個別の絆、⑦探索・遊び、⑧性機能である。そして、これらの機能が1つでも正常に働かないと、子どもの生存がおぼつかなくなったり、発達に重大な障害をもたらすと考える。

過去の欧米の孤児院において、重度のホスピタリズムに陥ったのは、機能面の中で、哺乳は人工栄養によって補えたが、学習刺激は欠乏し養育内容も不十分で、特定の人との絆がない状態のためだった。この状態は20世紀の初頭、Pfaundler によって職員による愛情深い養育の大切さが見出され、養護第一の養育原則が主張されたことで改善されていった（宇留野、1953）。その後、20世紀の中頃になると Bowlby (1951) によって特定の人との絆、愛着の重要性が取り

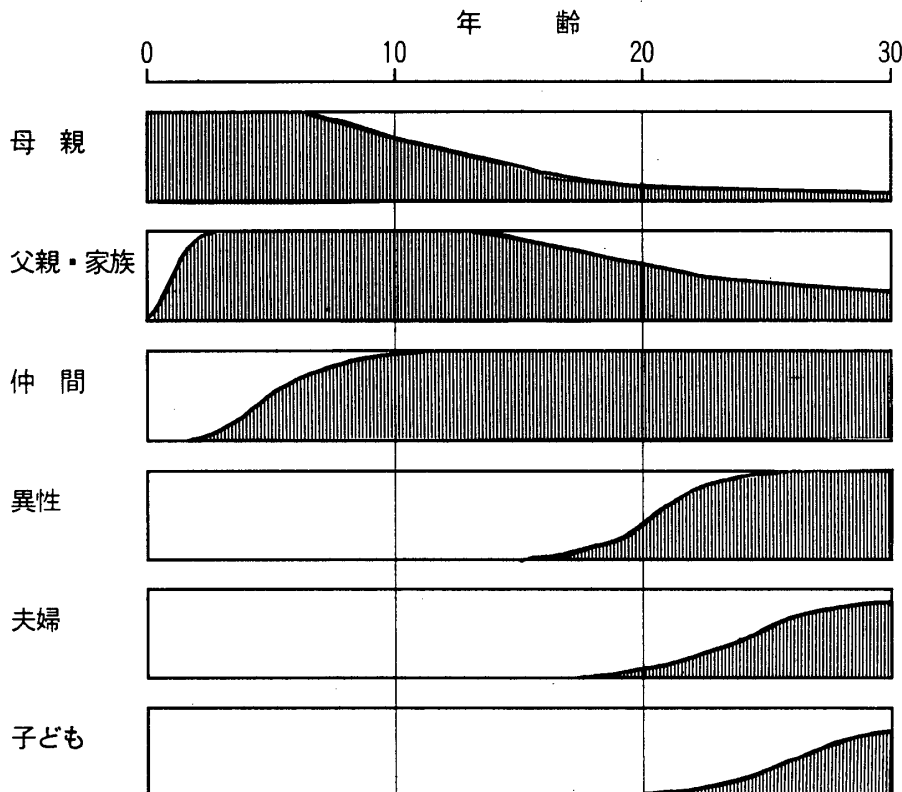


図5 人間環境の展開

上げられた。それに伴って、施設職員の充実が図られ、養育状態が改善され、ホスピタリズムが低減していった。そして、1970年代の Tizard の時代には、哺乳・接触要求・刺激はほぼ満足できる状態になったが、それでも交替制養育のために、1人の乳児が50～80名の養育者に世話される状態であったため、個別の絆が形成されず、2歳児の言語発達が遅滞し、8歳児の対人関係にまだ歪みが見られた (Tizard & Hodges, 1978)。そうした結果から、欧米では施設養育の限界が主張され、家庭養育へと大きく転回していったのである。一方、施設存在を前提とし、施設養育を改善する方向に向かう日本の福祉施設において、著者が関わった1987年からの乳幼児ホームの実践では、特定の養育者との絆の形成と維持が考慮された結果、乳児期の発達面ではほとんど問題がないほど改善された。それでも、幼児期の生活環境の拡大が充分でないため、探索・遊び機能の発達が充分なされず、2歳半の時点における言語発達や概念発達に十分な伸びが見られなかった (金子, 1993)。いずれにしても、このような施設養護の歴史から、機能面の保障によって、子どもの心身発達の向上がもたらされてきたことが明らかであろう。

ところで、各機能の中では、出生時既に、学習系・哺乳系・養育系の3つが機能している。そして生後1年間で、哺乳以外の栄養摂取、移動能力、養育者との個別の絆の形成、及び探索・遊びが相対的に大きくなっていく。それに対して、哺乳は生後2年程度で役目を終える。最後に、思春期に入ると性機能が活発になり、次世代を産み育てる準備が始まり、その後も各機能はその必要性に応じて活動が推移していく。

こうした機能の発達の展開に伴って、人間環境と生活環境も変容していく。図5の人間環境

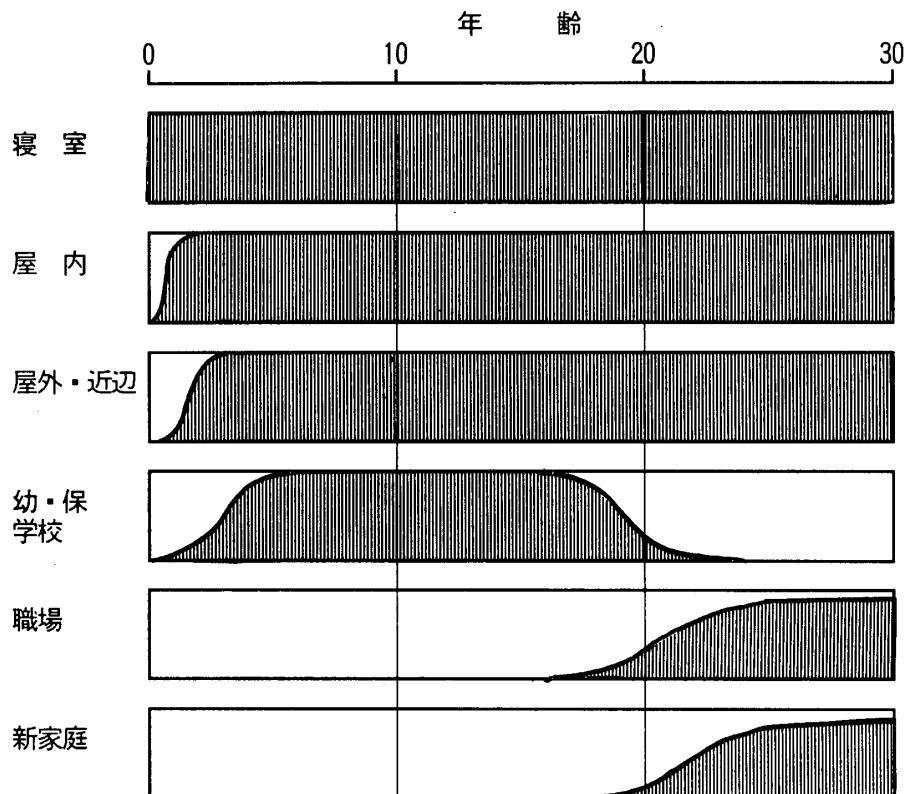


図6 生活環境の展開

## 金子 龍太郎

では、出生時は主として母親が中心となるが、乳児は開放系として、理論的には無限に広がっている開かれた対人関係の中で成長していく。そのため、乳児期初期から生みの母親以外の人物が主として養育に携わることもあるし、母親が死亡した場合には、全面的に他の人物に関わることも考えられよう。いずれにしても、一般的には①母親が主たる対人環境を占めている状態から、②父親や他の家族に広がり、その後③仲間、④異性との関係が大きな位置を占める。そして、新しい家族を形成して、⑤夫婦、⑥子どもとの関わりが主となっていくのである。

次に図6には子どもがその生活環境を拡大していく様子を示している。出生時には自力で動けなかった乳児が移動能力を獲得するにつれて、生活範囲は①寝室内ベッドから、②屋内の各部屋、③屋外・近辺、そして④幼稚園・保育所・各種学校と広がっていき、徐々に共同社会の一員となっていく。そして、成人後も⑤職場、⑥新家庭と展開していき、特に新しい家庭を築き、次世代を育成するための生活が中心を占めるようになっていく。

さて、このモデルの第1の特徴は、発達において各機能面がいずれも不可欠な要素であり、他の機能で置き換えることができないが、人間環境と生活環境は代替が可能と想定する点にある。これまで、人類の社会・文明の進歩とともに代替の範囲が広がってきたのであり、今日においては、社会や文化の違いにより、様々な人間環境と生活環境の元で子どもは成長していく。また、一人の特定の養育者（普通は母親）と愛着を形成するのが基本と考えるが、時には複数の対象に順位をつけて愛着する場合もある。そして、絶対に一人でないといけないというものではなく、一人だからいいというものでもない。しかしその場合、愛着の対象が一人でも複数でも、順調であれば問題ないが、歪みがあれば弊害が見られる。ここで考慮すべき点として、社会や文化の多様性の中で、必要不可欠な機能、たとえば乳児と養育者との個別の絆をおろそかにすると発達が阻害されるという事実があろう。結局、複数養育者であっても、機能を満足していれば問題はない。育児の形態は可変だが、育児の機能は不変なのである。

第2の特徴としては、出生時から複数の下位系の存在を前提とするが、各下位系には個体発生上で時間的ズレがあるため、時間的に先行する系の及ぼす影響が大きいという、不平等の相互連関が存在すると考える。たとえば、乳児期の養育者との関係（養育系）がその後の仲間関係に大きく影響し、その逆の影響は少ない。養育系は仲間系形成の原因ではないが、大きな影響を及ぼすものであり、その存在がなければ新生児の生存がおぼつかず、結果として次の仲間系の発達が不可能になる場合もある。初期の養育者との愛着（養育系）を無視した仲間系が成り立たないと想定する点は、Bowlbyの愛着理論や Harlowの愛情系理論に依っている。

こうして、人間を開放系ととらえた、機能・人間環境・生活環境の3側面モデルによって、乳児にとって重要な人間環境（母親）が欠けた場合、代替者（父親・姉・祖父母・保母等）が、子どもの生存・発達にとって不可欠な機能（学習・哺乳・養育等）を補えば、発達の障害をもたらさないという見方が成立する。そして、その場合の生活環境も家庭でなければならないということでもない。家庭に代わる場所において、機能と人間環境を保障できれば、子どもが健全に発達していくといえるのである。換言すれば、「生みの親より育ての親」を理論づけた

ことになる。こうして、本モデルによって、特定の養育者や特定の養育場所にとらわれない見方を提唱するに至った。そして、前成的かつ後成的、個人レベルかつ対人レベル、及び機能面での普遍性と形態面での多様性を同時に複眼的にとらえて相補的に認識し、初期条件や養育条件（家庭・施設）に依存しない等結果性（結果的に同じ発達レベルに達する）を想定することで、自然な家庭以外の場所で養育を受ける乳児の発達保障が理論的にも成り立つのである。

### 5) 養育系と施設養育

「開放系」の概念にたてば、人間は他の人間や周囲の環境とシステム（系）を形成する、外界に開かれた存在であり、他者や外界と絶え間無い交渉を行うことによってその存在が成り立つ。それゆえ、他者の存在がなければ交渉も起こりえず、様々な機能は生起しない。

養育者と乳児との交渉としては次のような一連の行為が挙げられよう。養育者が乳児の側に行くときそれに対して乳児が笑う。すると養育者が抱き上げてあやす。また、泣いている乳児を見て、養育者が抱いてお乳を飲ませる。そうすると、乳児は満足して、養育者の顔を見ながら喃語を出すという行動も見受けられよう。このように交渉は絶え間無く、二者間で循環的に生起する。特に早期の養育系においては、養育者と乳児を密着したシステム（系）と考え、両者の存在があって初めて、養育者から子へ、子から養育者への愛着が育っていくととらえる。両者が応答的に関わり、時間的・空間的に関わる関係の中で、常に一体感を抱くことが不可欠なのである。ただし、常に両者が密着している必要はない。一時的に空間的に離れていても、認知・記憶能力の媒介により、互いの存在を認識できればよい。また、乳児が求めた時にだけ応答的に関わっていけば、両者の交渉は停止することはない。これは、時空を超えて存在する情報・イメージによって両者が結びついているともいえる。

ここではあえて、母子相互作用という用語を用いない。その理由は相互作用（inter-action）という言葉では、養育者と子どもが個別に存在して、個体と個体間で生起するという意味を有しているからである。そうではなくて、この場合には養育者と子どもが一体となった一つの系を形成しているのであるから、その構成要素間、すなわち養育者と子どもの中で交渉が生起するととらえると、intra-action とか intra-system-action（システム内交渉）とでも称した方が適切な現象だといえるのである。

以上のように、システムの的に子どもと子どもを取り巻く人間環境の問題をとらえると、乳児の発達に不可欠な要因として、常に身近にいる養育者の存在が浮かび上がってくる。ホスピタリズムという母性的養育の喪失状態は、換言すれば子どもと養育者が系を形成できない状態といえるのであり、言語・感覚刺激と同時に、心の絆を形成する存在としての養育者が不在の状態だったのである。

ここにおいて、養育者は系を形成する一翼を担うが、その存在をさらに要素に分けて、「言語・感覚刺激」要素と「心の絆」要素ととらえる、Rutter (1972) などの研究者の分析的視点を慎重に解釈する必要がある。現実の養護場面では、施設職員が実の母親代わりとして、献身的な愛情を子どもに注ぎ、生活を共にして、その子どもの将来を見守ってくれる養育者だからこそ、

## 金子 龍太郎

子どもの発達に必要な言語・感覚刺激の提供者となりうる。絆はあるが刺激は与えない養育者とか、絆はないが十分な刺激を子どもに与える養育者など存在しない。

子どもの健全な精神発達にとって、養育者との絆と物的・人的刺激のどちらが必要不可欠な要因であるかについては、子どもの情緒面に関わる研究者は前者を主張し、知的発達に携わる研究者は後者を挙げていた。しかし結局、どちらの意見も正しいとはいえない。たしかに、人間間の絆と知的刺激の両者とも子どもの発達を保障する大きな要因ではあるが、どちらか片方でも成り立たず、両者を単に加算しただけでも十分ではない。母親代わりの養育者の存在を機能によって要素的に分けるのではなく、人間的刺激として、一人の養育者の存在をそのまま認める全体的思考が求められている。

## 3. 授 抱 性

## 1) 第3の新生児の姿—授抱性

人間の新生児は他の哺乳類と比較して、妊娠期間が長く母体の体重に対する割合が大きく生まれ出るといった特徴がある。また、新生児の運動機能は未熟な状態で、自力で移動できず、養育者に抱かれるだけの存在である。しかし、その一方で、感覚機能はかなり発達しており、出生直後から母親の顔をながめ、匂いを覚え、乳汁の味を知り、柔らかい母親の胸に抱かれて安心できるという感覚を持ち合わせている。最近の研究では、既に子宮内の胎児期から五感を駆使して様々な学習を行っていることまで明らかになっている(庄司、1989)。

このように、人間の新生児は未発達な運動機能と高度な感覚機能を持ち合わせているという特徴を持ち、その特異性は際立っている。その特徴をドイツの学者たちは1920年代から「世界開放性(Weltoffenheit)」と称し、人間の発達が「出来上がる(entstehen)」ものではなく、「自己を形成する(sich formen)」という、環境との様々な相互作用の元に進行すると考えた。すなわち、人間は鋭敏な感覚器官を持ち、世界つまり周囲の環境と関わりを持つことを前提として生まれ、環境に働きかけ環境を取り入れることによって成熟・発達が進むと考えたのである(Portmann、1951)。しかしながら今日に至っては、この世界開放性は人間に固有のものではないと考えるべきであろう。前節の開放系概念によれば、あらゆる生物はすべて環境に対して開かれており、環境と一体となって絶えざる相互作用を行っているのである。そのため、人間存在だけを世界に開かれた存在ということはできない。ただし、世界の開かれ方、すなわち系統発生と個体発生の関わりが種によって異なっており、人間の場合は後天的な個体発生的学習が非常に重要となり、出生後も世界、すなわち環境との関わりが大きい生物といえるのである。

さて数10年来、哺乳動物の新生児はPortmannによる鳥類の分類にならって就巢性(Nesthocker)と離巢性(Nestflüchter)に2分されてとらえられることが多かったが、Hassenstein(1987)はこの2分法が不完全であると主張した。つまり、哺乳類の中でも、有袋類・翼手類・霊長類はこの2分類に入らない。これらの動物の新生児の運動機能は未熟だが、巣の中にと



どまっておらず、母親や他の成体の身体につかまり、運ばれるという特徴を持つ。有袋類では、非常に早期の未熟な状態で生まれ、母親の袋の中で育てられる。また、霊長類の新生児は、開眼・開耳・発毛状態で出生し、自力で母親にしがみつく。Hassenstein は、母親に常に運ばれるこの種の哺乳類の新生児を Tragling と名付け、従来の就巢性と離巢性に加えて、第3の形態として提唱したのである。Tragling は、tragen（運ぶ、抱く）というドイツ語の動詞に ling（一される、小さい存在を示す）という接尾語をつけて、「運ばれるもの、抱かれるもの」という意味を持つ。

人間の新生児は運動的に未熟な存在だが、霊長類共通の、母親に抱きついたり抱かれたりして過ごすという特徴を持ち、著者は Tragling に対して「授抱性」という訳語をあて、人間の子どもを「養育者に抱かれて育てられる存在、養育者に働きかけて抱かせて育てさせる存在」として、養育者と受動的かつ能動的に結びつく存在ととらえている。子どもは抱きつき抱かれる、そして養育者は抱くのであり、そうした機能は双方で予定調和的に、系統発生の過程で組み込まれており、子どもも養育者も「抱きつく、抱く」能力を授かっているのである。そして、親に抱かれて育てられた子どもが、後には我が子を抱いて育てる親となっていく。こうして、哺乳類に属する人間の乳児にとって不可欠な「授乳」と同様に、霊長類に属する人間の乳児に欠かすことのできない機能を表す言葉として「授抱」をあてた。またこの訳語により、二者一体の系を形成している人間の乳児と養育者の特徴を明確に示すことができよう。

たしかに、霊長類の育児形態は非常に多様性に富んでおり、新生児の状態も出生直後から自力で親の背中や腹部に抱きつき運ばれるものから、人類のように抱きつくことができず、親に全面的に依存して運搬されるものまで様々である。しかしながら、こうした多様性の中にも、共通する特性として「抱きつく」能力が存在するのであり、人類にもその能力が痕跡的に残存していると考えるのである。

次に、前述の開放系概念で触れたように、乳児の周囲の人間環境は理論的には無限の人間に対して開かれている。それ故、子どもが「抱きつき、抱かれる」対象となる養育者は実の母親に限定されず、父親や他の家族、あるいは家族以外の様々な人が関わると想定できよう。また、この授抱性概念は、養育者と乳児が密着した状態にあることだけを意味しない。両者が身体的に密着すること等を通して、両者の絆が形成されていくと同時に、養育者が乳児にとって「心の安全基地」や「母港」となる。そして、そこを拠点として、他の人間との関わりが増大し、生活環境が拡大していき、結果として養育者から自立して、分離に向かうようになる。この様相は前述の、図5と図6の人間環境と生活環境の発達的変遷に示した通りである。このように授抱性概念では、将来の「子別れと親別れ」を前提としており、ここにおいても開放系概念を視点に入れた授抱性概念が成立する。

ここで進化の過程をさかのぼって、出生直後の幼体の姿を、鳥類と哺乳類の場合で推測してみよう（図7）。まず、爬虫類から進化した鳥類においては、進化初期の段階では、地上に巣を作り、孵化したヒナは自力で歩けるという、トカゲなどの爬虫類型の離巢性から、翼の進化に

伴って飛翔可能となり、樹上や崖に巣を作るようになった一部の鳥類に就巢性が出現したと考えられる。他方、哺乳類が地球上に出現した頃、ネズミに類似していた原始哺乳類の新生児の本来の姿は就巢性であり、系統発生の過程で、草食動物や水棲動物で離巢性が出現し、飛翔動物や樹上動物で授抱性が出現したのであろう。

また中川（1983）は、哺乳類においては、鳥類の就巢性と離巢性という2分類はあてはまらないとして取り入れず、動物園長としての体験から哺乳類を哺乳と保護の様式によって次の3つに分類している。この分類は母子を一体としてとらえている点で興味深い。

①抱擁型：これは霊長類の特徴で、新生児から手足の把握力が強く、出生後直ちに母親にしがみつぐ。子どもの腹部にはほとんど毛がなく、背部には長毛が密生していることから、霊長類の子どもは母親と腹部で密着するような形態を有しているといえる。そして抱擁の実態は、抱くというよりもむしろ、包み込むといった方が適当であり、まさに母子一体の様相を呈している。さらに、この型では任意の時に哺乳が可能となるのである。

②添い寝型：アナウサギ、リス、スカンク、イタチが当てはまり、出産は洞穴や地中の穴で行われる。子どもは未熟な状態で生まれ、母親は穴の中に身を横たえ、子どもを腹部に巻き包むようにして保護し哺乳を行う。

③舐触型：シカ、キリン、シマウマなど多くの草食動物がこの型であり、出産後はすぐに自力で立ち上がり、親と共に移動でき、自ら母親の乳首を探することができる。母親による抱擁や添い寝のような行為は見られないが、出生後の母親は頻りに子どもの身体をなめ、形は違えど母親は密接に関わっているのである。

さらに、井坂（1986）も同様に、Portmannによる就巢性と離巢性、そして人間を二次的的就巢性ととらえる分類に疑問を投げかけ、哺乳類の新生児に対して新たな分類を行った。その結果、哺乳類の出生状態によって、4つの発育段階を見出した。

この分類に基づいて、井坂は人間の子どもの類人猿と基本的には共通性を持っており、特に特殊な存在ではないと主張する。母親にしがみついたり運ばれる動物で、第3の分類に入るのは、有袋類（カンガルー・コアラ）、翼手目（コウモリ）、貧歯目（アrikui・アルマジロ）、有鱗目（センザンコウ）、皮翼目（ヒヨケザル）、さらに霊長目が該当する。そして、霊長類に属する人類は、これら第3段階の「開眼・開耳・被毛・しがみつぐ」に入るとする。このように、上記の哺乳類に共通している cling（しがみつぐ）という運動能力が分類の大きな基準となるのである。

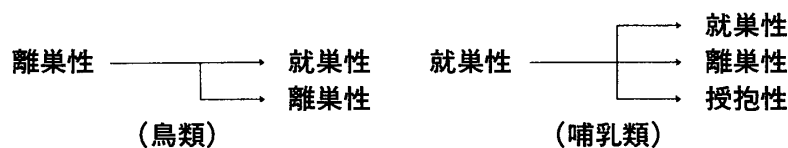


図7 鳥類と哺乳類の進化に伴う新生児の姿の変遷

次に井坂は、就巢性と離巢性の変異が進化段階だけでなく、生活様式への適応によって決まることを、ウサギ類を例として明快に論じている。系統発生的には同じ段階に位置するウサギの仲間において、就巢性の性質を示すのが穴の中で出産するアナウサギである。他方、穴を作らず出産して、産後すぐに走ることができる離巢性のウサギがノウサギである。両者の中間にはメキシコノウサギとワタオウサギが入り、いずれも生活様式に伴って、新生児の姿が大きく異なっている。さらに、4種のウサギの妊娠期間はあまり差異はなく、妊娠期間の長さとも新生児の姿が対応していないことがわかる。

以上の諸説から、哺乳類を新生児の姿によって3分類し、人間が第3の分類、すなわち授抱性とみなす根拠が得られた。以下には、3人の研究者の分類を表1に示す。こうして、Portmann のいうように、人間の新生児が他の動物とは全く異なる、二次的就巢性として生理的早産で生まれ、1年間は子宮外妊娠の状態だから胎内と同様に温かく包まれているのではなく、授抱性動物だからこそ、母親に抱かれて育てられるととらえるのである。

表1 3人の研究者による哺乳類分類の比較表

Hassenstein	中 川	井 坂
就巢性	添い寝型	閉眼・閉耳・無毛—のたくる。 種によってはしがみつく。
授抱性 (Tragling)	抱擁型	閉眼・閉耳・被毛—はうか、しがみつく。 開眼・開耳・被毛—はうか、しがみつく。
離巢性	舐触型	開眼・開耳・被毛—種に特有な移動が可能。

## 2) 授抱性概念による乳児理解

さて、人間の乳児を授抱性ととらえる中で、まず把握反射を取り上げよう。新生児の手のひらを指でさわると、その小さな手がかもうとする。早期出産児ほど運動機能が未熟であるが、それにもかかわらず自力で物をつかんでぶらさがることさえできる。また、おびえた子どもが母親に抱きつくことも授抱性動物の特徴である。霊長類では母親への抱きつきは、手指・足指の間に親の体毛をはさみこんで握ることで可能となる。人間の新生児も強い把握反射が手足に見られるが、それに対して人間の親には体毛がほとんど失われてしまっているために、その適応的意味をほとんど果たさないまま、出生直後の把握反射は消失してしまう。また、モロー反射は驚愕反射とも呼ばれ、仰向けに寝かせているときに、驚かせたり垂直に落下させた時などに生じる。この反射に関しては、霊長類の子どもは母親の移動の際には腹側にしがみついているが、母ザルが木々の間を移動する際に、衝撃に応じて反射的に強くしがみつくといい適応的機能を持っていると説明される(鎌田、1990)。人間においては、モロー反射はもはや痕跡にすぎないが、この反射により抱きに応じる姿勢をとることができる。

また、乳児を安定させるには、抱いて揺らしたり、軽く叩いたりという刺激が有効である。

## 金子 龍太郎

そして、裸体で寝かされている新生児のお腹に布をまきつけたり、沐浴時に布を腹側にかけると不安が解消されることも知られている。腹側に何らかの接触刺激を感じていることにより、緊張感がやわらぐという。これらの現象も授抱性のあらわれといえよう。

ところで、霊長類の新生児が自力で母親に抱きつくことができる能力は種によって差がある。ニホンザルでは生後30分もすれば、母親に自力でぶらさがれるが、チンパンジーなどの類人猿になると抱きつき能力は弱まっており、生後2、3か月たないと持続して母親にぶらさがれることはできない(糸魚川、1982)。母子が腹部と腹部を合わせて、抱擁の姿勢をとることは霊長類に共通しているが、ニホンザルの新生児は基本的には自力でしがみつき、母親の介助を必要としない。しかしチンパンジーでは、母親の片方の手を必要とし、人類では両方の手による介助を必要とするという種による差異が認められる(松沢、1990)。そして、新生児に対する養育者の重要性が種間で異なっていることは、ニホンザルやアカゲザルの新生児では母親と隔離して飼育することが可能なのに対して、人間の場合には養育者と隔離して育てることが不可能で、ほとんど死亡してしまうという違いが見られることが、これまでのサル類の隔離実験の結果や、かつての欧州の孤児院の歴史からも伺えるのである。

さて、人間の新生児は片腕で自分の体重を支えることができ、足は不完全ながら、つかみ保持できる。抱きつき反射のような行動が実際に存在するにもかかわらず、その能力が低下していき、使用されなくなってきた。こうした行動は痕跡行動といえ、系統発生の初期の段階では、この行動は適応的な意味を有していただろうと想定できる。たとえば、ダチョウは飛ぶことができない鳥で、翼はもはや今日では何の役にもたたないのであるが、小さな羽で正しい飛翔行動を行う。この行動様式は、ダチョウの祖先が太古の昔には十分な飛翔能力を有していたことを物語っている。それがある時期になると、もはや残存しているにすぎない存在となってしまったが、飛翔行動の型は保持されている。これと同様に、授抱性である人間の新生児においては、かつては有用であったモロー反射や把握反射が痕跡的に残存している。このことから、人類の祖先では、子どもが自力で母親にしがみつける時代があったと結論できよう。

ところが、足が二足歩行に適した形態をとることにより、人類が直立二足歩行へと進化すると、乳児が足指で抱きつくことが困難となってきて、抱きつき能力が失われていき、その世話にかなり手をとられるようになった(Johanson & Edey, 1981)。人類の祖先として考えられている化石人類の中で最も古い350万年前の、アウストラロピテクス・アファレンシスの化石を見ると、足の親指は対向性でなく、人類と同じく平行していた。二足歩行するアファレンシスは現存する類人猿とは異なり、足の指で把握できない構造となっており、このような古い時代から人類の抱きつき能力の低下が始まったと推測できる(Lewin, 1984)。

次に直立二足歩行と平行して生じた変化が無毛性である。人類の祖先が樹上生活から草原へ進出してきた200万年前頃は、体表は長い毛でおおわれていたと考えられている。人類の進化の過程で、体毛がいつごろから減少しはじめたかは、直接的証拠がないので確かなことはわからないが、その起源は非常に古く、アウストラロピテクスの段階において相当進行していたら

しい（佐倉、1983）。したがって、乳児の側に手指による抱きつき能力が残存していたとしても、親の側で体毛が失われたために、実際には抱きつくことが不可能となり、一層子育てが困難となったと推測される。

また山本（1983）は、人間を含む霊長類の乳汁が他の哺乳類一般に較べて総固形成分が少なく、乳糖成分が多いという特徴を持つことから、動物界での人間の位置づけを行っている。それによると、霊長類などの、脂質・タンパク質・灰分（無機質）が比較的少なく、乳糖の多い組成の動物では、子どもが要求したときに応じて頻繁に哺乳する。このような乳汁特性から浮かび上がる哺乳形態は、子どもの泣きやむずかりの信号に応じて哺乳するあり方となる。また、文化によっておおい方、抱き方には多様性があるが、乳児は母親と身体的に密着しており、いつでも授乳を受けることができる。人間の場合、かなり頻繁に授乳しなければ栄養的に不十分な乳汁組成のために、3、4時間おきに授乳を繰り返すことを通して、母子は一つのシステムを形成できるのである。アカゲザルとテナガザル、及び人間の乳汁組成には差があまりないことから、この乳汁組成と育児形態は霊長類に共通と考えられる。

人間社会においては、人工栄養の発明によって、母乳の出ない母親を持つ乳児や、母親を失った乳児が数多く救われてきた。しかしその一方で、母乳の出る母親から母乳を奪ってきた歴史があり、それは今日も続いている。そして、人前で胸をはだけて母乳を飲ませることを、文明の遅れた野蛮な風習とみなし、母親が哺乳することをためらわせるあり方や、おんぶや抱っこ、そして添い寝を時代遅れとみなす考えは、いずれも人類が系統発生上で獲得してきた授乳や授抱の特性を軽視しているものと言えるのである。

ところで、霊長類の養育形態を詳細に比較検討した根ヶ山（1989）によると、原猿類から類人猿に至るまで、子どもを運搬し保護しながら育て、授乳期間も長期化することにより、母子が緊密な関係をとる方向に進化してきたという。しかしながら人類においては、乳児の運動機能が未成熟であるために、母親が乳児と分離する機会が増え、母親以外の人間が育児に関わるようになった。さらには文明の進歩により運搬の道具が発明され、人工栄養が普及することも加わり、母親の育児関与は軽減され、かつ非常に多様化したのであり、育児形態の驚くべき多様性は、他の霊長類には認められない独特な性質だという。

確かに、人類の母子の関わりは断続的で、母子が分離することも多く見られるが、たとえ空間的に離れていても、イメージや記憶の能力によって、母子が心理的にはつながっているのが人類の母子関係といえよう。したがって、人類の母子関係は他の霊長類と比較しても、保護性と緊密性を深めていると考える。ただ、その様相が異なっており、人類以外の多くの霊長類では、母子が常に密着して触覚・味覚・嗅覚といった近感覚系が優位なのに対して、人類では母子が離れていても視覚や聴覚といった遠感覚系や、イメージや記憶といった大脳の機能が優位になって母子関係が成立していると考えられよう。

今日の文明社会の中では、母乳育児が低下し、離乳もかなり早まっているのは事実で、母子が分離している育児形態も増加しており、多様化が進んできた。しかし今日では、こうした多

## 金子 龍太郎

様化のもたらす弊害が認識され始め、たとえばユネスコや WHO は、母乳育児や母子同室の勧告をしている（山内、1992）。なによりも、人類の育児上の多様性が無制限に許されるものでないことは、ホスピタリズムの歴史や今日の様々な家庭病理からも言えるのである。したがって、今日見られる育児上の多様性を無条件に人類の特殊性にとらえ、他の動物と区別する指標とするのでなく、育児の多様性が場合によっては育児を歪め、子どもの発達を阻害することもあるのだから、異常性と考え、人類という哺乳類かつ霊長類に属する種としての、子どもの発達に必要な不可欠な要素として「授乳」や「授抱」を保障することが正常な育児のあり方だと主張したい。

#### 4. 開放系と授抱性による施設養育の理解

##### 1) ホスピタリズム現象との関連

いわゆるホスピタリズムや母性剝奪と呼ばれてきた現象は、システム的には「養育系の形成不全」となる。ホスピタリズムによって数多くの施設児が死に至り、発達障害に苦しんだ背景には、乳児が養育者の存在を前提として生まれついているという、発達上の前成的側面を見落としてきたことに大きな原因があった。すなわち、養育系という乳児にとって不可欠な機能を前提とした発達保障機構が、DNA にプログラムされているという認識を持たず、その発現に必要な十分な養育条件の検討を怠ったまま、不適切な人為的養育を行った歴史があった。

次に開放系の観点からは、発達のだどの段階においても、環境と一体となって展開していく子どもの発達の後成的側面が同時に成り立つ。養育者と子どもがそれぞれ構成要素となっている養育系においては、構成要素が代替可能となり、養育者が実の母親でなくてもよく、人工栄養が可能ならば、父親、祖母、そして保母にも養育者に成りうる可能性が開かれている。養育者が誰であるか、一人か複数かは文化・社会によって多様である。最も自然で、可能性の高いのは出産した母親だが、母親が不在ならば困難はあっても他者がそれを補うことができるのである。重要なことは、人間の新生児が実の母親に限定されないが、特定の養育者を必要としているということであり、人類共通の養育系を構成する機能（哺乳・養育・個別の絆、等）が満足できれば、養育者が誰であっても子どもの発達が保障されるという施設養育上の事実がある。複数の養育者と複数の仲間の中で生活する乳児院の環境下でも、養育担当者として特定の子どもを受持ち、責任をもって養育すると、担当児と養育者間には強い絆の形成が認められる（金子、1993）。そして、同クラスの他の養育者に対しては、第2、第3の愛着を抱くようになり、さらに終日生活を共にする同クラスの仲間ともつながりが生じた。こうして施設養育において、様々な人に囲まれた、開かれた人間環境の中で子どもの発達は保障されるという、開放系の概念が重要となる。

また、授抱の特性を考慮しなかったために、施設に送られた乳児の生存を脅かし、重い発達障害をもたらしたともいえるのが、いわゆるホスピタリズムであった。歴史上、親を失ったり親から見捨てられた乳児を、他人である孤児院の職員が育てることは非常に困難とされてきた。

そこではまず、親からの分離や喪失によって乳児の生理的变化が生じた。つまり、脈拍や呼吸が乱れ、睡眠や食欲が変化し、情緒不安や異常行動などの様々な変調をきたした。さらには、与えられた食物を消化吸収できずに、栄養失調に陥り、感染症にかかりやすくなり、ごく短期間で死に至る例がほとんどを占めていた。それに対して医者は成す術がなかったが、やっと今世紀の初頭になって、ドイツの小児科医 Pfaundler がその原因として、養護の欠如や愛情不足による子どもの情緒的变化が神経系に影響を及ぼし、末梢血管の収縮をもたらし、各器官への栄養補給を阻害したため、身体的抵抗力が著しく低下したと考えた。そして、施設養護下の発達障害を集団養護障害ととらえ、孤児院の中に愛情ある養護法を取り入れ、集団養護の弊害を少なくすることによって、死亡率が大幅に低下した現象を説明したのであった（宇留野、1953）。

しかしながら、その後も多くの施設では授抱性を考慮しない施設のあり方が大半を占めており、たとえば1940年代に Spitz (1962) の研究対象であった孤児院では、ベビーベッドの周囲が布で被われていて、乳児の視野はさえぎられ、他の人間の存在をほとんど知ることができない状態であった。孤児院の乳児たちは、感覚的・社会的刺激が剝奪された状況で生活しており、養育者と関わるのは授乳時とおしめ換えの時だけという中で、始終交代する多数の職員に世話されていたのであった。その後、Bowlby (1951) の WHO 報告書により、養育者と子どもとの身体的接触や両者の愛着が考慮されるようになり、欧米の施設のあり方が大幅に改善されていった。

## 2) おわりに

今日の人間社会は、いわゆる自然の状態ではない。様々な人工的環境の元で我々は生きざるを得ない。周囲の環境を生活しやすいように変えてきたのが文明社会であるが、そうした環境には人間の本性を阻害する要因が含まれていることを十分認識しなければならない。ここで考えるべきことは、こうした文明社会にあっては、過去の原始社会に帰るという方向ではなく、人工的環境下で生活していても、人間の生得的な本性としての諸能力をいかに発揮するかをめざすあり方が求められているのである。人間は他の人間と共に暮らさざるをえない社会的存在の故に、人間的環境の元で生活せざるを得ない。それ以外の環境下では正常な社会的存在になりえないということは、様々な剝奪条件下での子どもの発達異常の現象が示す通りである。人間的環境であり、かつ人間の本性を育ててくれる場が求められる。ここにおいて、家族・血族という個体レベルの血縁ではなく、ホモ・サピエンス・サピエンスという種レベルの血縁という観点にたてば、人間という種を育てるのは、血縁関係の家族に限定されないが、同じ種の人間でなければならない。養育者や養育場所の違いは多様であっても、同種の人間の営みには普遍性が求められ、それは人間による人間的環境の中での育児によって初めて保障されるのである。しかしその一方で、人間発達の普遍性を保障するためには、一人一人の発達環境の多様性が不可欠となる。というのは、発達における初期条件もその後の発達環境も異なる中で成長する子どもが、普遍的な一人前の人間として成長し、社会の一員となり、新しい家庭を築き、子

## 金子 龍太郎

孫を産み育むためには、一人一人異なる発達の過程、多様性のある発達環境が前提となるからである。そして、開放系概念の際に結論したように、機能面の普遍性と人間環境と生活環境の多様性を同時に認識することが求められている。

したがって、人間の子どもが健全に育つ場は、血縁でつながっている人々からなる家庭であるとは限らない。いくら実の両親の元でも、適切な養育がなされておらず、潜在的母性剥奪 (masked maternal deprivation) 状態に陥っていることは多い。逆に施設であっても、家庭以上に専門家の視点から、子どもの発達を保障する養育が行われることもある。養育の場が家庭か施設かといった問題よりも、その場が子どもの発達をどのように考えて養育しているかが問われるのである。すなわち、子どもの発達に必要な養育環境や養育者のあり方という「養育の場の機能」が重要なのであり、父母共に存在しているか否かとか、家庭か施設かといった「養育の場の形態」は本質的ではない。

家族と離れて暮らさざるを得ない児童施設での生活は、こうした多様な養育環境の一つであり、人間環境と生活環境は代替可能であるので、それ自体は何ら問題がないはずである。しかしながら、これまで乳児院や養護施設で成長する子どもたちに発達の遅れや歪みが見られたのは、施設の職員が少なく十分な養育ができないことを初めとする、養育水準の劣等性のために、換言すれば養育系の形成や授抱性を充分反映できない養育が行われていたために他ならない。その証拠に、養育水準を高めて、特定の養育者との絆を重視し、養育系を形成し授抱性を考慮した養育体制に改善していけば、家庭児と同等な発達が認められたのであった (金子、1993)。

そして、施設児の研究を施設のみにとどめておくのではなく、施設という特殊な環境下で育たざるをえない子どもたちの姿を臨床的に理解し、そこでの姿、正常な側面と異常な側面の原因を探ると同時に、今日の家庭病理の姿と突き合わせて、両方の現象の共通原因を求める上でも、開放系と授抱性の概念は有効となろう。結局、集団であろうとなかろうと、病院・施設であろうと家庭だろうと関係ない。授抱特性を考慮しない養育系の形成不全が根本原因なのであった。そして、この開放系と授抱性の二つの概念により、実の母親や家族と離れて、児童施設で生活せざるを得ない子どもたちの発達保障が理論的に成り立ち、ホスピタリズム解消をめざしてきた数多くの施設実践を根拠づけ、今後の施設養育に大きな希望をもたらすであろう。

## 引用文献

- Bertalanffy, L. v. 1949 Das Biologische Weltbild I—Die Stellung des Lebens in Natur und Wissenschaft—. 長野 敬・飯島 衛 (訳) 1954 生命—有機体論の考察—. みすず書房.
- Bertalanffy, L. v. 1968 General System Theory. Foundations, Development, Applications. 長野 敬・太田邦昌 (訳) 1973 一般システム理論. みすず書房.
- Bower, T. G. R. 1977 A Primer of Infant Development. 岡本夏木, 他 (訳) 1980 乳児期. ミネルヴァ書房.
- Bowlby, J. 1951 Maternal Care and Mental Health. 黒田実郎 (訳) 1962 乳幼児の精神衛生. 岩崎書店.



- Bowlby, J. 1982 Attachment and Loss, Vol 1. Attachment. 黒田実郎, 他 (訳) 1991 母子関係の理論 1 愛着行動 (改訂版). 岩崎学術出版社.
- Harlow, H. F. 1971 Learning to Love. 浜田寿美男 (訳) 1978 愛のなりたち. ミネルヴァ書房.
- Harlow, H. F. & Mears, C. 1979 The Human Model: Primate Perspectives. 梶田正己・酒井亮爾・中野靖彦 (訳) 1985 ヒューマン・モデル：サル学習と愛情. 黎明書房.
- Hassenstein, B. 1987 Verhaltensbiologie des Kindes.
- Hubel, D. H. & Wiesel, T. N. 1962 Receptive fields, binocular interaction and functional architecture in the cat's visual cortex. Journal of Physiology, 160, 106-154.
- 井坂由美子 1986 誕生と発育(2) 哺乳類の子どもの誕生. 浅見千鶴子 (編) 比較発達学—サル・ヒトから人間へ—, 39-50. プレーン出版.
- 糸魚川直祐 1982 動物の成長 —比較研究の立場から—. 細谷 純・糸魚川直祐・鹿取廣人・柏木恵子・三宅和夫 (編) 講座 現代の心理学 2 人間の成長, 57-148. 小学館.
- Johanson, D. C. & Edey, M. A. 1981 Lucy: The Beginnings of Humankind. 渡辺 毅 (訳) 1986 ルーシー：謎の女性と人類の進化. どうぶつ社.
- 鎌田次郎 1990 行動発達の生物学的基礎. 荘厳舜哉・根ヶ山光一 (編) 行動の発達を科学する, 27-52. 福村出版.
- 金子龍太郎 1993 乳児院と養護施設の養育環境改善に伴う発達指標の推移 —ホスピタリズム解消をめざした実践研究—. 発達心理学研究, 4, 145-153.
- Lewin, R. 1984 Human Evolution: An Illustrated Introduction. 三浦賢一 (訳) 1987 ヒトの進化：新しい考え. 岩波書店.
- Lewis, M. 1979 The social network: Toward a theory of social development. The invited address at the 50th annual meeting of the eastern psychological association. 山田洋子 (訳) 社会的ネットワーク：社会的発達理論の建設に向かって. サイコロジー, 34, 1, 69-73; 2, 68-72; 3, 61-67.
- Lewis, M., & Feiring, C. 1989 Early predictions of childhood friendship. In: T. J. Berndt, & G. W. Ladd (eds.) Peer Relationship in Child Development, 246-273.
- 増井光子 1986 動物の親は子をどう育てるか. どうぶつ社.
- 松沢哲郎 1990 動物の発達と人間の発達. 村井潤一 (編) 新・児童心理学講座 1. 子どもの発達の基本問題, 95-130. 金子書房.
- 中川慶子 1992 システム理論からの示唆. 東 洋・繁多進・田島信元 (編) 発達心理学ハンドブック, 364-383. 福村出版.
- 中川志郎 1983 動物園で見る動物の親子関係. 周産期医学 (臨時増刊号：母子相互作用：周産期医学からみた育児の原点), 13, 74-77.
- 根ヶ山光一 1989 霊長類における母子関係の進化. 心理学評論, 32, 21-41.
- Portmann, A. 1951 Biologische Fragmente zu einer Lehre vom Menschen. 高木正孝 (訳) 1961 人間はどこまで動物か —新しい人間像のために—. 岩波書店.
- Rutter, M. 1972 Maternal Deprivation Reassessed. 北見茅雄, 他 (訳) 1979 母親剝奪理論の功罪 —マターナル・デプリベーションの再検討—. 誠信書房.
- 佐倉 朔 1983 ヒトの特性. 人類学講座編纂委員会 (編) 人類学講座 3 進化, 211-266. 雄山閣出版.
- 庄司順一 1989 胎児の行動. 馬場一雄 (編) 発達人間学 I：生理編, 1-25. 東西医学社.
- Sluckin, W. 1970 Early Learning in Man and Animal. 佐藤俊昭 (訳) 1976 現代心理学の展開 4：人間と動物の初期学習. 誠信書房.
- Spitz, R. A. 1962 Die Entstehung der ersten Objektbeziehungen; Direkte Beobachtungen an Säuglingen während des ersten Lebensjahre. 古賀行義 (訳) 1964 母子関係の成りたち. 同文書院.
- Thomas, A. & Chess, S. 1980 The Dynamics of Psychological Development. 林 雅次 (監訳) 1981

子供の気質と心理的発達. 星和書店.

Tizard, B. & Hodges, J. 1978 The effect of early institutional rearing on the development of eight-year-old children. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 19, 99-118.

宇留野勝正 1953 乳幼児保育施設に於ける保健衛生. 小児科臨床, 6, 11-16.

山本高次郎 1983 母乳. 岩波書店.

山内逸郎 1992 母乳哺育に対するユニセフ勧告. 小児保健研究, 51, 12.

吉川研一 1992 リズムを自然発生させる非平衡の科学. 日経サイエンス, 7, 62-73.